

+ 6 8 【まぐま】

「かいじいよ。なんちゅうかちゅうかそば、わしもこれまで、たくさんのおぼけをしたが、かんがえてみれば、ほとんどのおぼけは、いじましいのう。なんちゅうかちゅうかそば、ちっぽけなにんげんを、びっくりさせるおぼけでのうて、このちきゅうを、びっくりさせるくらいの、でっかいおぼけは、いないもんかのう」

あるとき、そんなことを口走ると、懐爺は苦笑しながら、
「あのね金ちゃん。ちっぽけな人間を驚かす、いじましいやつをおぼけというんです。地球を驚かすなんてのは、おぼけとはいわずに、宇宙人とか異星人とかいうんです」

ぼくは納得しなかったので、
「おぼけはいるけど、うちゅうじんとか、いせいじんなんてものは、よみもののなかだけのもんじゃ。そういうもんがいたら、おもしろかろうと、くうそうしとるだけじゃ。わしがしりたいのは、なんちゅうかちゅうかそば、にんげんあいてのおぼけじゃのうて、ちきゅうあいてのおぼけのことじゃ」

「困りましたねえ」

といいながらも、懐爺は思い当たることがあったようです。

なぜなら、小鼻がさかんに動き口元が小刻みにふるえていますから。
「だしおしみせんと、はようおしえろや」

「はい。金ちゃんがそこまでいうなら、わたしも花咲か爺と呼ばれる男です、枯木に花を咲かせましょう。でも腰をぬかさなだけでくださいよ」

「なにぬかしとる。だしおしみじゃのうて、もったいぶっとるのか」

「【まぐま】です。どうです、腰をぬかしたでしょう」

「あほか。【まぐま】たあ、こぐまのなかまか」

「小熊でも大熊でも白熊でも真熊でも魔熊でも、ぬいぐるみの熊でもありません」

「だば、くまおとこかい」

「もっともっと、でっかいもので、それは地球の芯で燃え、喚き、蠢いているものです」

「それはおそろしそうじゃのう」

ぼくは腰はぬかさなかったが、腰をおろし、何かをつぶしました。

「金ちゃん、肝をつぶしたでしょう」

「いんや、うんこ、つぶしたんじゃ」

「おやまあ。それはわたしのうんこではありませんよ。たぶん、牛の糞です」

「こんなところに、うしがいるもんか。たぶん、くまのふんじゃ」

「もしかして【まぐま】の糞かもしれませぬ。いよいよ【まぐま】が噴火するのかもしれませぬよ」

「【まぐま】は、ふんかするんか」

「地震、雷、火事、親父。これはみんな【まぐま】のしわざです」

「おやじもかい」

「親父が噴火するのは、心の芯で【まぐま】が噴火するからです」

「おいおい。【まぐま】がおるんは、こころのしんじやのうて、ちきゅうのしんじやろ」

「つまりその、地球の芯は心の芯、心の芯は地球の芯です」

「ううむ。かいじいは、てつがくしゃじやのう」

「哲学者じゃなくても、それくらいのことはいえます」

「どちらにしても、むずかしいのう。むずかしいはなしは、わしはにがてじゃ。あばよ」

ぼくは、すたこらさっさと帰りました。